

外装材料の現状と今後の見通し

板垣博一

外装材料の現状

1 モルタル壁

外装材料の種類としては、湿式ではモルタル壁、しっくい壁、乾式では木質系、金属系、ALC、窯業系サイディングなどがあります。これまでモルタル壁の需要が圧倒的に多く、大半のシェアを占めてきました。モルタル壁がこのような普及、浸透してきた原因としては、

- 1) 継ぎ目のない仕上がりで美観に優れている
- 2) 外観に重厚感がある
- 3) 防火性能が優れている
- 4) 全国に左官屋という専門の職人がおり工事にはこと欠かない
- 5) 我が国では外装材料の原点を土壁においているなどが挙げられます。このため昭和55年までは、

外装材料総需要量の60%以上、6600m²以上のシェアを占めてきました(図1)。地域的には関東以西での普及率が高く、特に近畿、中国、四国地方では80%以上というシェアをほこってきました。

しかしながら、55年度を境にしてモルタル壁のシェアは、56年度で57%、57年度で55.5%と低下し、58年度には45.5%(図1)と、ついに50%を割るまでに落ち込みました。これは、モルタル壁のひび割れなどの性能面や、工期が長引くなどの施工面での問題点が取り上げられるようになったことでもあります。意匠性の高い窯業系サイディングが急激な成長を遂げたことが大きな原因になっているようです。

2 窯業系サイディング

窯業系サイディングには石綿セメント板、木片セ

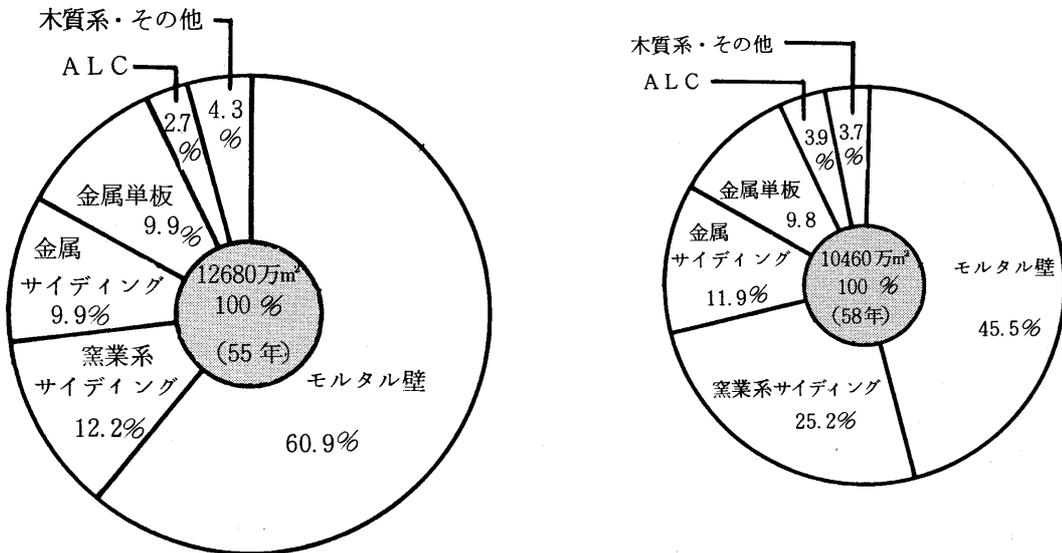


図1 外装材料の種類別シェア (昭和55, 58年)

メント板、炭酸マグネシウム板、けい酸カルシウム板などの各種素材があります。窯業系サイディングが始めて登場したのは、昭和38年三井木材が硬質木片セメント板を製品化してからですが、本格的に市場に出回るようになったのは52、53年頃からです。この頃になると新規の企業がどんどん進出して来たわけですが、52年には久保田鉄工、大建工業など4社、53年には昭和電工建材など3社、54年には創住工業など2社、55年には松下電工、東レグラサルなど5社がそれぞれ参入し、58年度では計19社が活動を行っています。

また窯業系サイディングは、他の外装材料に比べ性能面での長所を多く兼ねそなえていることも急成長を遂げた原因と言えます。列挙してみますと、

- 1) 単体で防火構造になる
- 2) ひび割れしない
- 3) 凍結しない
- 4) 断熱、遮音性に優れている
- 5) 意匠性が優れている

などがあります。

窯業系サイディングの需要量は、55年1550万 m^2 (12.2%、外装材料総需要量に占める割合、以下同様)、56年1810万 m^2 (15.5%)、57年2170万 m^2 (18.1%)、58年2640万 m^2 (25.2%)と急速に伸びてきており、59年にはその割合が30%を越すであろう(具体的統計値はまだ発表されていない)と予想されています。地域的には北海道、東北地方での普及率が高くそれぞれ69.7% (440万 m^2)、38.2% (360万 m^2)となっています。

3 金属サイディング

上方、金属サイディングの需要量はここ数年ほぼ横ばいに推移していますが、住宅着工戸数が減少していることを考慮すると若干増加していると言えます。金属系サイディングは従来亜鉛鉄板に石こうボードを裏打ちした製品が主流を占めていましたが、省エネルギーを背景に硬質ウレタンフォームを裏打ちした製品が51年に登場し、これを契機にして需要が増加したわけですが。需要量は55年1260万 m^2 (9.9%)、56年1190万 m^2 (10.2%)、

57年1240万 m^2 (10.4%)、58年1240万 m^2 (11.9%)となっています。

4 ALCサイディング

また最近ALCサイディングの需要が伸びてきています。ALCというのは石灰とけい酸を原料とし、発泡剤を加え、高温高压の蒸気下で養生した軽い気泡コンクリートのことです。ALCはその体積の70%を独立気泡が占めており、そのため普通のコンクリートの $\frac{1}{4}$ という軽さで、断熱性能が優れています。近頃は大手プレハブメーカーでALCサイディングを採用する傾向が強まっており、58年度は400万 m^2 、総需要量の3.9%を占めています。

今後の見通し

モルタル壁のシェアは、今後さらに低下し41%になる見込みです。これに対して窯業系サイディングは30%と上昇し、モルタル壁にかなり接近する見通しです。その後窯業系サイディングは40%程度を占めるようになると予想されていますが、西日本ではモルタル壁が根強い人気を得ていること、40%程度も普及してくると次第に飽きが来ることなどから、それ以上のシェアの獲得は難しいようです。

また金属系サイディングは、今までの需要動向からみて、飛躍的な増加は望めずこのまま横ばいで推移するとみられています。

ALCサイディングは、プレハブ住宅で採用されるケースが多くなっていることから、今後窯業系サイディングと並んで大きく伸びると予想されています。

北海道における外装材料の現状

北海道における外装材料の総需要量は、現在643万 m^2 で、内訳はモルタル壁66万 m^2 (10.3%)、窯業系448万 m^2 (69.7%)、金属系76万 m^2 (11.8%)、ALC53万 m^2 (8.2%)となっており、先に述べたように窯業系サイディングが圧倒的なシェアを占めています(図2)。北海道も6~7年前までは、全国的外装材料のすう勢と同じように、

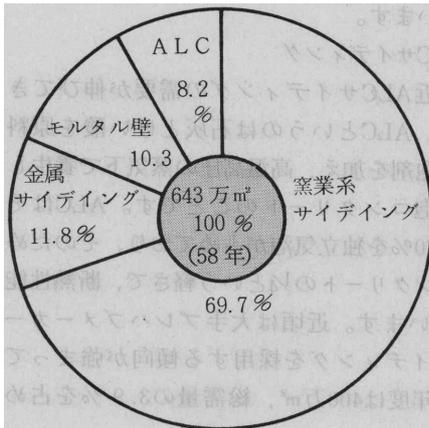


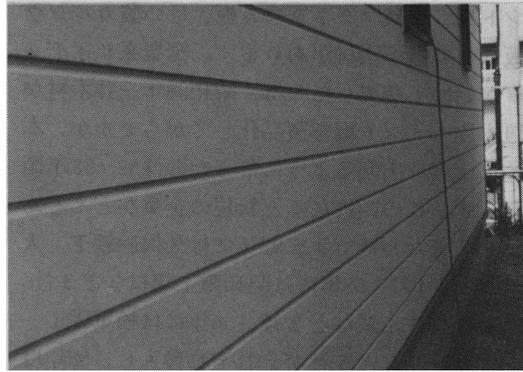
図2 北海道における外装材料の種類別シェア

モルタル壁の需要が大部分を占め、窯業系も含めた他のサイディングはわずかを占めるにすぎませんでしたが、この数年で窯業系サイディングは飛躍的な向上を遂げたわけでは、北海道でこのように普及するようになった原因としては、

- 1) オイルショックを契機として省エネルギー思想が芽生え、外装材料にも高断熱性の製品が要求されるようになった
- 2) 北海道は独特の洋風建築が多く、またトタン屋根が多いことから、建築主の趣向を現実化しやすい、意匠性の高い外装材料が要求されるようになった
- 3) 北海道は冬と夏の寒暖差が60 以上もある非常に気候、風土条件の厳しい地域ということで、耐凍結融解性能の高い高品質の外装材料が求められるようになった
- 4) 冬場でも建築が可能となった

などが主に挙げられます。

北海道では、現在10社ほどが窯業系サイディングの販売活動を行っていますが、道内で売れ行きの良い製品は全国的にも好評を得ることから、各メーカーとも非常な力を注いでいます。言いかえ



外装材料として使われている

ますと、窯業系サイディングの場合、北海道の需要動向が全国の需要動向を示唆すると言えます。

林産試験場では以上のような外装材料の需要動向とカラマツ間伐材の有効利用という観点から、7年前からカラマツ・セメントボードの開発に着手し、製造技術の確立に成功しました(写真)。そしてここに、カラマツ・セメントボードの製品化への道がひらかれることになりました。このことは、カラマツ間伐材の有効利用の道がひらかれ、間伐促進の起爆剤ともなると考えられ、道林務部や道内林業、林産業サイドからも今後の発展が期待されています。

参考文献

住宅外壁市場の全調査(昭和59年)：

産業統計研究所
(林産試験場 改良木材料)